

東邦学誌第47巻第2号抜刷
2018年12月10日発行

賀川豊彦と関東大震災
～100年続く復興支援～

藤 沢 真理子

愛知東邦大学

賀川豊彦と関東大震災 ～100年続く復興支援～

藤 沢 真理子*

目次

- (1) はじめに
- (2) 賀川豊彦とは
- (3) 賀川豊彦と関東大震災
- (4) 賀川豊彦の復興支援の特徴
- (5) 100年続く復興支援
- (6) まとめ

引用文献

(1) はじめに

賀川豊彦は宣教師で社会改良家である。1923年9月1日関東大震災が起こった時、豊彦はすぐに震災支援に取り組んだ。賀川豊彦の震災支援の特徴は、震災から100年近くたつ今日でもその事業や活動が継続されている点である。

2011年3月11日東日本大震災が起こり、7年の月日が過ぎた。東北大学の今村文彦教授は2018年2月14日名古屋で開催された21世紀シンポジウム「産官学民連携による減災戦略～迫り来る南海トラフ地震に備えて」において「東北で災害記憶の風化が始まっている」と報告した。日本では毎年のように、各地で様々な災害が起こっている。災害の記憶を風化させないということは、再び起こるかもしれない災害に備えるために重要である。

現在、各地で災害記憶を風化させない方法を模索している。最もよく知られている方法は、石碑などに震災や被害のことを刻む、被災した建物や構造物を保存する、そして写真や映像やインタビュー記事等を残すなどである。この方法は「目に見える形」といえる。一方、目に見えないが震災記憶を残す方法も考えられる。筆者は、賀川豊彦の関東大震災の復興支援が100年近く継続していることは災害記憶を風化させない有効な方法ではないかと仮説を立てた。石碑のように見える形ではないが、事業や活動が継続していることで、その事業の沿革や歴史を振り返ると必ず災害を思い出す。つまり、災害を忘れない仕掛けとなっている。

本稿では、賀川豊彦が関東大震災に際して取り組んだ復興支援が100年近く継続していること、そしてそれが災害記憶の風化防止に役立つ一つの方法であることを明らかにしていきたい。

* 愛知東邦大学人間健康学部

研究方法として、生涯多くの著作を残した賀川豊彦本人の随筆、小説、論文等を分析するとともに、賀川豊彦に関するキリスト教、社会福祉、文学、労働運動などの専門家たちの論文や記述からも分析を進めたい。また、筆者が賀川記念館において出会った賀川豊彦と一緒に活動をした人や会ったことがある人からの聞き書きも含めて、その人物像、活動、そして関東大震災の復興支援について考察していきたい。

まず、賀川豊彦とはどのような人物だったのか、述べていきたい。

(2) 賀川豊彦とは

賀川豊彦は、1888年7月10日神戸市で賀川純一と、かめの次男として生まれる。父の純一は徳島県の名家の出身で、神戸で廻船業を営んでいた。母のかめは父の本妻ではなかったが、四男一女を産んでいる。豊彦が4歳の時に父そして母が相次いで亡くなり、豊彦は姉とともに徳島の本家に引き取られることになった。そこには父の本妻と義母が住んでいた。こども時代、豊彦は「妾の子」として、父の本妻や近所の子供たちにいじめられ育った。孤独な日々を送っていた豊彦が、徳島中学校の時に英語を学ぶために知り合ったローガン牧師やマヤス牧師に出会ったことで、父の愛、神の愛を知り、クリスチャンとなる。その後、父の後を継いでいた兄が事業に失敗し徳島の家屋敷を失い、さらに兄も亡くなるという絶望の状況の中で豊彦を救ったのはマヤス牧師夫妻だった。将来牧師になりたいという豊彦に対して、当時面倒をみてくれていた叔父は激怒し勘当する。その時にもマヤス牧師夫妻は豊彦を温かく家に迎えてくれた。

1905年4月、徳島中学校を卒業した豊彦は、牧師になるために明治学院高等部神学予科に入学する。1907年3月明治学院高等部2年を修了し、マヤス牧師が教師となる新設の神戸神学校へ転校することとなる。神戸神学校は9月開学であったため、半年ほど愛知県内で伝道活動を手伝う。7月から豊橋教会で長尾巻牧師の下、伝道活動を行っていたが、8月に13歳の時診断されていた結核が悪化し危篤となる。その後療養し神戸神学校で勉強を続けるが、医者から数年の命と言われる。「残り少ない命であれば貧しい人たちのために使いたい」と、21歳の時、1909年12月24日、神戸のスラムに住み込み、貧しい人たちの支援、キリスト教伝道を始めた。

1913年スラムで活動奉仕していた芝ハルと結婚する。ハルは豊彦を生涯支え、豊彦から「大蔵大臣」と言われるほど豊彦の多岐にわたる事業の経理を担った。

1914年、貧しい人たちを個別に支援する救貧では根本的な解決にならず、戦争や世界恐慌の影響を受け失業者が減らないこと、貧困者が減らないこと、そしてアメリカからの資金援助がストップしたことなどから、豊彦はアメリカのプリンストン神学校・プリンストン大学へ、新たな支援方法を模索するために3年間留学する。同じ頃、妻のハルも横浜の共立女子神学校で神学を学ぶ。

1917年、帰国した豊彦はアメリカで学んだセツルメント運動や労働運動を日本で展開し始める。1918年友愛会に加入し、神戸地区の労働運動に参加し、やがて関西の指導者となる。

1919年豊彦は、労働運動と並行して消費組合運動を始める。1921年には神戸購買組合、灘購買

組合の創設に尽力し、これらは後に合併し、組合員100万人以上のコープこうべにつながる。

1920年10月、豊彦は神戸のスラムでの活動を基にした小説『死線を越えて』を出版し、ベストセラーとなる¹⁾。三冊シリーズになった本の印税は現在のお金で10億円以上と言われ、その印税のほとんどは豊彦個人でなく、労働運動、消費組合運動、無料診療所などに使われた。『死線を越えて』は日本語だけでなく数十か国で翻訳出版され、Toyohiko Kagawaの名前は世界で知られるようになった。

1921年6月、神戸の川崎造船所、三菱造船所で労働争議がおこり、豊彦は指導者として活躍する。しかし、7月29日警官隊と衝突し、豊彦以下201名が逮捕される。その後、労働運動は激化し、平和的デモ行進を主張する豊彦と相いれなくなり、豊彦は労働運動から離れる。

1921年10月、豊彦は当時最も苦しんでいた農民のために杉山元次郎らと日本農民組合を結成する。農民の多くは小作農であり、地主に小作料を払わなければならなかった。しかし、不作や凶作が続き、小作料を支払うことができない農民は生活に困窮し、娘を売ったり、病気になっても医者にもてもらうことなく死んでいった。豊彦は農民運動として、若いリーダーを養成するための農民福音学校を始めたり、農業の多角経営を目指し立体農業を提唱する。また、当時農民が加入できる医療制度はなかったため、現在の国民健康保険制度につながる医療制度の創設に尽力する。

1923年9月1日、関東大震災がおこる。この支援活動については次に詳しく述べたい。地震から1か月後の1923年10月、豊彦一家は震災復興のために、神戸から東京へ移る。1924年震災支援活動が目目され、豊彦は帝国経済会議、中央職業紹介委員会などの委員になり、政府に意見を述べるようになった。1924年11月から1925年7月まで、豊彦は欧米で講演活動や視察を行う。1925年11月、大阪の四貫島でセツルメント活動を始め、12月からは百万人救霊運動を開始する。

1926年兵庫県西宮市へ移り、農民福音学校を開く。同年4月東京に江東消費組合を組織する。1928年6月庶民のための金融機関として中ノ郷質庫信用組合の認可を受ける。1929年11月兵庫県西宮市から東京松沢村へ移住する。以後拠点は東京となる。神戸の活動は豊彦の一番弟子である武内勝らが継続する。武内勝が「賀川の弟子になったことについては、家族の元に戻ってきた父がキリスト教に傾倒するようになり、父の勧めで賀川の『新川』の伝道所を訪ねたことが機縁になったという。賀川豊彦が、神戸イエス団の生みの親なら、武内勝は育ての親である。」と浜田直也は言う²⁾。

1931年2月新渡戸稲造らと東京医療利用組合設立運動を開始する。1932年政府から社会保険調査員を委嘱される。

豊彦は、1923年の関東大震災以外にも多くの災害救援に取り組んでいる。1927年3月に起こった北丹後地震では救護に尽力する。1933年3月3日三陸地方で地震と大津波が起こった際は、イエス団のメンバーが東北へ行き三陸の悲惨な状況を報告している³⁾。また、1934年9月21日室戸台風が関西地方を襲った際は、大阪の四貫島セツルメントハウスが台風で倒壊し、豊彦やイエス団のメンバーは四貫島の人たちを支援した。また、1938年7月5日神戸水害や1943年9月11日鳥

取大震災などでも救援に取り組んでいる。

1936年、ノルウェーのオスロで開催された世界日曜学校連盟大会に招待され「日曜学校と世界教化」について講演し、また1938年インドで開催された世界宣教大会に日本代表として参加している。

1940年8月25日反戦運動容疑で渋谷憲兵隊に拘引され、巣鴨拘置所に8日間拘留されるが、当時外相だった松岡洋右の尽力により釈放される。1941年平和使節としてアメリカへわたり戦争防止のために力を尽くすが、交渉成立せず、太平洋戦争が起こる。1943年5月反戦思想や社会主義思想の理由により神戸相生橋警察署で留置される。同年11月にも反戦論的行為があるととして東京憲兵隊本部の取り調べを受け、以後公的な活動が困難となる。さらに空襲により豊彦の関係している社会事業施設のほとんどが焼失する。

1945年8月15日第二次大戦が終結する。世界中に多くの有力者の知り合いがおり、世界で知られた人物であった豊彦に対して、当時の東久邇宮総理は「内閣参与になってほしい」と直接依頼する。豊彦が世界でどのように知られていたかについては、1939年アメリカで発刊された“The Three Trumpets Sound”の中で、世界の三聖人として、アフリカの医療に尽くしたシュバイツァー博士、インドのガンジーとともに、賀川豊彦が記されていたこと等からもわかる。

1945年8月30日読売報知に、豊彦は「マッカーサー総司令官に寄す」を掲載している。終戦間際に神戸市長となった中井一夫は「国民は将に飢えんとし、珠に我神戸市民が異常なる食糧難に陥った時、当時市長であった私を、自らマッカーサー元帥に紹介して、飢えんとする同胞のために食糧を、乱れんとする国内の治安のために、銃剣と血を見ざる占領政策を要請する機会を与えられたのも、これがためでありました。」と深刻な食糧問題を解決するために豊彦がGHQに仲介してくれたことを語っている⁴⁾。

1945年9月27日豊彦は国際平和協会を設立し、機関誌『世界国家』を発行する。9月厚生省顧問となり、10月神戸市顧問となる。11月日本協同組合同盟をつくり、会長となる。1946年食糧対策審議会委員になり、貴族院議員に勅選される。1947年2月、天皇皇后に「日本に於ける社会事業の現在及将来」を進講する。同年7月全国農民組合を組織し、組合長となる。1949年12月から一年間、イギリス、ドイツ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなどをまわりキリスト教伝道を行う。

1952年広島市で、第1回世界連邦アジア会議を開いて、その議長となった。第2回は東京で、そして第3回は京都で開催しいずれも議長をつとめている。1958年8月、世界平和のためのキリスト者国際会議を開き、その議長もつとめている。これらの活動は高く評価され、豊彦は生涯においてノーベル文学賞にノミネート2回、ノーベル平和賞に3回ノミネート、1回推薦されている。最後の推薦の時に亡くなったため受賞することはなかった。

1959年1月キリスト教伝道の途上、香川県高松市で倒れ、翌年4月23日72歳で亡くなる。

賀川豊彦の活動は多岐に渡る。豊彦の孫でデザイナーであった賀川督明前館長は記念館建て替える時、豊彦の活動がわかりやすいようにグラフィックデザインを工夫している。豊彦の活動の

大きな柱は、キリスト教・生活協同組合・医療・保育や教育・労働運動・平和活動・災害支援・執筆活動・農民運動などに及ぶ。これらの活動が同時に行われている時期もあるため、何をした人なのかわかりにくいのだろう。無論、上記に述べたような活動すべてを豊彦一人で行っているわけではなく、救霊団（のちにイエス団）、イエスの友の会、そして雲柱社など多くの団体や組織が関わっている。しかし、10億円以上と言われる『死線を越えて』の印税や豊彦の著書の売り上げによって得た収入がこれらの事業を支えた時期も長く、また豊彦の個人的な著作や講演などによって彼らの活動を日本だけでなく世界に知らしめたのも事実である。豊彦は牧師であり、その活動の原点はキリスト教にある。聖書の「神を愛し、隣人を愛せよ」という教えに忠実に生きた豊彦は、その時代その時代に最も苦しんでいる人、ある時は労働者、ある時は農民、ある時は病人を支援した結果、事業が多岐に渡ったといえよう。

1909年21歳で神戸のスラムに住み込み、セツルメント活動を始めた賀川豊彦が、神戸の賀川から全国の賀川に変わったきっかけが1923年9月1日関東大震災の復興支援であった。

次に、賀川豊彦と関東大震災の関わりについて述べていきたい。

（3）賀川豊彦と関東大震災

① 関東大震災とは

まず、関東大震災とはどのような災害であったのか、振り返っておきたい。

1923年9月1日11時58分、大正関東地震が発生した。地震のマグニチュードは7.9で強い揺れが街を襲い、その後、大規模火災が起こる。『横綱町公園～東京都慰霊堂・復興記念館』によれば、「本所・被服廠跡の惨状は有名で焼死者三八、〇〇〇余人」とある。⁵⁾

「正午を迎えるほんの2分前、関東地震は発生した。はじめは緩慢な揺れが続いていたが、そのうちに段々と大きくなり、遂には立ってられないほどの激しい揺れに襲われた。首都圏とその周辺を直撃したこの巨大地震は、10万棟を超える家屋を一瞬のうちに倒潰させた。（中略）また、山間部では崖崩れや山津波などの土砂災害、沿岸部では津波被害を発生させた。更に、台所の裸火などが火元となって多くの火災が発生し、東京や横浜では台風の余波による強風に煽られて数時間後には大規模な延焼火災に拡大した。」⁶⁾

この地震による被害状況について、様々な資料によって被害者数が異なるが、ここでは中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1923関東大震災報告書 第1編』よりその被害状況をまとめておきたい。死者数は、東京府70,387人、神奈川県32,838人、千葉県1,346人、静岡県444人、埼玉県343人、山梨県22人、茨城県5人で合計105,385人である。東京府の中でも、東京市の死者数は68,660人であり、その死因は火災によるものが65,902人、住家全潰によるものが2,758人である。また、神奈川県の中では、横浜市において火災による死者数が24,646人、住家全潰による死者数が1,977人で、合計26,623人であった⁷⁾。

一般的に、この地震では東京で多くの人が焼死し、横浜で建物家屋の倒壊による圧死が多かったと考えられているが、統計からは、東京も神奈川も火災による死亡が9割以上を示している。

また直下型地震と思っている人も多く、プレート境界型地震であることを理解していないので、津波の発生や津波で死亡した人がいることを知らない人が多い。

賀川豊彦は「関東地方の被害区域は一府六縣に亙り、その被害世帯数は五十九萬二千二百六十四戸、その人口二百七十四萬人に達したのであつた。東京市に於て總人口の七割四分が、その住宅を失つた。」⁸⁾とその被害について記しているが、この数字は当時発表されていたものである。

② 賀川豊彦が関東大震災を知る

豊彦が関東大震災について知ったのは、地震の翌日、9月2日であった。「当時はテレビもラジオもなかった。関東一帯は電信も電話も不通になった。いくつかの大きな新聞社は焼失を免れたが、機械が動かず、その日は活動不能に陥り、大震災の実情が大阪の報道機関に達したのは1日夜であった。」⁹⁾ 2日の大阪毎日新聞を読み、この地震について知った豊彦は、すぐに神戸YMCAや教会のメンバーと集まり、正午には支援について話し合った。豊彦は東京へ行くことを即決した。「取り敢えず当時の金で二千円分の物資を整え、その日の午後、聖公会の武内宗六牧師と山城丸に乗船して神戸港を出発した。」¹⁰⁾

神戸を離れる前、豊彦は「はる子（筆者注：妻のハルは春子、はる子、ハルなどの呼び名がある）に、被害地では布團と衣類と金がすぐにいることだから、それを集めておくやうにといひおいた。はる子は、純基を背にくくりつけ、佐藤一郎と一緒に荷車をひいて、下町から山手にかけて、布團や衣類の寄附をもとめてあるいた。」¹¹⁾ 当時の様子について、賀川ハル史料集に次のような記事が掲載されている。「賀川春子夫人は早朝よりイエス団に来られ、災害地に送るべき衣類を整理してられる。皆で山手方面へ出かけ、衣類を恵まれるよう軒別に頼んで歩く。宏壮な邸宅に住む人達の冷淡さ、時に寺田君ら熱心党の反感をそそる」¹²⁾と書かれており、ハルたちが苦勞して布團や衣類を集めていた様子がわかる。

9月3日、豊彦が乗った船は横浜港に到着したが、港が壊れており着岸できなかった。その晩船に泊まり、翌日9月4日、豊彦は横浜に入った。どの建物も焼失し、火災は続いていた。最初に、豊彦は歩き、東神奈川から品川行の列車に乗った。それから豊彦が若い頃勉強した明治学院へ歩いていった。その夜、明治学院の友達の中山昌樹の家に泊まった¹³⁾。

9月5日、豊彦はまだ火災がくすぶっている中、東京市庁を訪問した。そこの役人は「米は用意した。しかしお金やほかの物資が足りない。特に秋がやってくるので多くの衣類を手に入れたい」という。豊彦は上野の丘に登り、焼け落ちた街を見下ろした。それは悲惨な光景だった。周辺に多くの焼死体があった。また、豊彦は東京YMCAを訪問する。日本YMCA史には「9月5日、神戸から迎えた賀川豊彦の指導によってさらにこの救護活動は大きく展開された。総務部、天幕部、配給品部、宗教部、収容部、避難民輸送部、教育部などの組織を整えて、その救護事業参加者も320名以上の多数に上るようになった」と書かれている¹⁴⁾。豊彦は、倒壊し焼け落ちている悲惨な東京を見て大きなショックを受けたが、同時に上野寛永寺や増上寺や谷中寺の塔、浅草寺の大きな屋根が残っているのを見て驚いた。彼は信仰心で建てられたそれらの建物は強い地震に

も耐えることができたと考えた。そして、神戸の人に一刻も早く東京の状況を知らせたいと考えたが、列車が込み合い、乗ることができなかった。その夜も明治学院で泊まった。

9月6日、豊彦は品川まで歩き、品川から東神奈川まで列車に乗った。そこで静岡県清水行の船に乗り、清水に到着したのは9月7日9時だった。その後神戸まで列車に乗り、同日神戸にもどった。豊彦は神戸にもどってから2日間ほど、眠ることができなかったという。東京でみた悲惨な光景を思い出すからである。「あゝ Mも死んだ。Sも死んだ。誰れもやられた。」¹⁵⁾

③ 関東大震災における賀川家と親戚の村岡家

豊彦にとって、東京は徳島中学校を卒業した後、明治学院で2年間神学の勉強をした場所である。また、横浜は妻ハルの出身地であり、ハルの親戚である村岡家の人々が住んでいた。聖書の村岡と言われた村岡平吉が興した福音印刷の神戸工場で、豊彦とハルは出会った。工場に豊彦が讚美歌を教えに行ったことがきっかけであった。ハルの叔父である村岡平吉は震災前年に亡くなっていたが、ハルが兄弟のようにつきあっていた従姉弟たちが横浜にいた。被害状況や必要な物資を調査しに向かった豊彦は、横浜の村岡家の消息を知りたいと思いつつも、一刻も早い被災者支援をするために神戸にもどる。ハルは神戸で各家を訪問し、布団や衣類などを寄付してもらっていた。豊彦とハルは街頭募金や講演会などで資金を集め、物資を調達し、再び東京に向かう。

豊彦は『地球を墳墓として』に次のように書いている。「私は横濱に多くの知己を持ってゐた。私の妻の従弟は山下町にある相當に大きな印刷會社の社長であり 私と妻の結婚を媒酌してくれた人はその支配人であった。それで餘程それらの人々の運命を尋ねたかつたが 私は自分の血縁知己の人々を尋ねるために來たのではなく 全く東と西とのキリスト教の救援團體の連絡を取りに來たのだから 一刻も早く その連絡を取ることに努めなくてはならぬと思つたので 私事を顧ることを全く抛擲した。そしてまた郵船會社の三島丸へのランチの出る横濱ドック会社の波止場に來た。後で知つたことであつたが 妻の従弟の印刷工場では約四百名の職工（その中の多くは製本女工）の内 逃れ得たものは僅かに八名位で 社長 支配人其外凡ての職工は煉瓦の下に埋れて死んで了つたと云ふことであつた¹⁶⁾。」

震災があつた年の10月末、豊彦とハルは東京の被災者を支援するため東京へ移る。豊彦・ハルが35歳の時である。

被災直後のハルの日記には関東大震災や村岡家に関する事は書かれていないが、震災から5年後の1928年12月29日（土）のハルの日記に次のようなことが書かれている。「昨夜ハ雨も少し降り夜半から風がひどい。死んだ水上や村岡一家の夢を見たので目を醒ましてからあの大震災の當時を追憶した。建物の下敷などになつて肉体の苦痛もそうであろうが、その場合の精神的苦痛ハ、母ハ子に、子は親に思ひを寄せ、世の終りとも思へる。その出来事に処して、たとへ堪い苦痛を味ふだろう。何にも考へる暇なく命の終りが有ればまだしも、意識が明かで救ひ出される望もなくなつた時の気持を考へれば、その災害をまぬかれた自分など、少し位の困難や苦痛がよしあつたとしても何のこともなく切り抜け得る筈であると今朝つくづく（筆者注：づくは「く」を

長くした字に点をふっている) 思ふた。」¹⁷⁾

ハルは子どもの時から横浜の伯母の家に行き、村岡家の子どもたちと日曜礼拝へ行っている。また、女中奉公を一年間した後、16歳の時、伯父の平吉が横浜の家に呼んでくれ、短い期間であったが、住吉女学校に通わせてくれた。17歳で、家族とともに移った神戸では、伯父の福音印刷神戸工場の女工となる。また、豊彦がアメリカ留学する時、26歳のハルは横浜の共立女子神学校に入学するが、入学前村岡家で泊まっている。また、学校が休みの月曜日には村岡家へ行っていた。ハルは従妹の雪と姉妹のように仲がよかった。雪は関東大震災の時、水上家の養女になっており、震災で水上家は全員亡くなる。また、ロンドンに行くとき神戸港へハルが見送りに行った従弟の斎も工場が全壊し、工員とともに亡くなった。

ハルは震災から5年たった1928年のある夜、震災で亡くなった村岡家の人々の夢を見て、建物の下敷きになってどんなに苦しかったであろうかと思うと眠ることができなくなった。震災の後、ハルは募金やふとん集め等に明け暮れ、そして10月末には拠点を神戸から東京へ移し災害支援に携わり、村岡家の人々を偲ぶ暇もないほど忙しい日々を過ごしていた。震災から5年、考えると眠れなくなるほど村岡家の人々を亡くしたハルの心の傷は大きかったのかもしれない。

豊彦・ハル夫妻にとって、東京や横浜は個人的関わりもあったが、それ以上に彼らは焼け野原となった東京の被災者のために全力を尽くす。次に賀川豊彦の復興支援の特徴をみていきたい。

(4) 賀川豊彦の復興支援の特徴

① 資金や物資の調達

神戸にもどった賀川豊彦は、東京の教会にお金がないことを知っていたので、支援基金を立ち上げるキャンペーンを始めた。

鳴門市賀川豊彦記念館の田辺健二館長は「賀川自身は、連日連夜、募金のための講演会を、関西、中国、九州などで催した。約40回の集会で7500円余り（現在の数千万円）の義援金を集めた賀川は、それを持って、10月7日再び上京。YMCAの人たちとともに、被害の最も甚だしかった本所深川の江東地域に救援の本拠地を置くことを決めた。東京全体がスラムになったようであった。救援活動は一時的な物ではなく、組織的、教育的に行われなくてはならないと考えた。賀川の神戸での貧民救済の経験が生かされた」という¹⁸⁾。

豊彦が復興支援で協力しあったのは、東京帝国大学の末広巖太郎、東京YMCAの石田友治らである。10月7日、豊彦は再び東京へ行き、東京市庁を訪れた。被災者にとって一番必要な物は近づく冬に備えるためのふとんだった。10月14日神戸にもどり、豊彦は西日本女性連盟の会合に参加し、参加者たちにふとんを寄付してほしいと頼んだ。また、豊彦は自分が所蔵していた多くの洋書売り、さらに500円を手に入れた。また、豊彦は兵庫県知事に頼み、イエス団基金から5000円を引き出した。10月16日、豊彦とイエス団の3人の若者たちは物資を積み込んだ船で東京へ向かった。

② 豊彦は本所松倉町でセツルメント活動を始める

賀川豊彦は、東京の本所にある横川小学校に4つのテントを建てる。豊彦は本所や深川の周辺を調査した結果、10月19日に支援拠点を本所松倉町にすることを決めた。彼らはアメリカ赤十字からもらったテントを建て始めた。

鳴門市賀川豊彦記念館の田辺健二館長は「大型テントを張り、震災救済活動の拠点とした。このときの救済活動に参加した人々と東京YMCAが協力し、本所基督教産業青年会が設立され、さらに中ノ郷質庫信用組合、光の家保育園、東駒形教会などが生まれた。大正13年4月、政府は、各界の代表を集めた諮問会議『帝国経済会議』を召集し、賀川もその一員に選ばれ、日本の経済復興のために手腕を振るった。東京は『帝都復興院』総裁の後藤新平の強力なリーダーシップもあって、新帝都として見事に復興した。」と賀川の復興支援を紹介している¹⁹⁾。

豊彦は支援にあたって、本所の人たちが神戸のスラムの人々と同じ問題をもっていると感じた。そして神戸でやってきた同じ方法で活動しようと考えた。それは、スラムの人たちと一緒に暮らすことから始める方法であり、「住み込む」、セツルメント活動の方法を本所でも取り入れた。豊彦は被災者と共に暮らすことで、彼らの抱えている悩みや痛みを理解することができると考えた。豊彦は被災者の「良き隣人」になりたかった。本所にテントを立て、セツルメント活動を始めた。家を失った人々もテントで暮らし始めた。

豊彦は、神戸のスラムで不良住宅の問題について長い間取り組んできたので、震災後の東京においてバラックが無秩序に建てられていることを憂慮した。豊彦は「バラックの建設は、東京市の頭の悪いことをよく暴露した東京市の役人は、バラックの住民に対して随分不親切だ。当局の考へでは、最初からバラックの住民を早く立退かせる為に、出来るだけ粗雑に造って、一刻も早く立退かせるやうに、出来るだけバラック避難者を虐待して追っ払う方針であった。それは私も当局に注意する度毎に『余り永く居られちゃ困るからなあ』という答えを聞いたことによっても、当局の意思が察せられる。」「何千人となく一箇所を集めて、新しく貧民窟を造らさような計画になっていた。市の言い分は監督がしやすいからと言うのである」「少し烈しい雨が降れば浸水の為に夜も眠れない有様で、芝離宮は全く今日貧民窟化し、物干しが無い為に露地は干し物のために通行出来ない位である」と厳しく批判している²⁰⁾。

豊彦は行政を批判するだけでなく、自分たちが今できること、目の前にいる被災者の暮らしを支援するため、できる限りのことに挑戦した。それは豊彦だけでなく、全国から東京の復興のために駆けつけた仲間とともに行われた。

③ 賀川豊彦とボランティアたち

賀川豊彦は日本で初めてボランティアという言葉を使った。正確に言うと、豊彦は「ボランチャー」と記している。その箇所を見てみると、「此夏はまた大勢のボランチャーが助けて下さるそうですから、調査に、救済に賑やかに働けること今から楽しみにして居ります。」と記している²¹⁾。現在の災害ボランティアが夏休みになると全国から多く参加するのと同じような光景が浮

かぶ。

豊彦とともに働いた人たちは、神戸のスラムで共に活動してきた人たちやイエスの友の会のメンバーや全国から駆け付けてきた人たちである。なかでも、イエスの友の会のメンバーは、震災直前の8月25日から29日まで御殿場で夏期祈祷会を開き、豊彦が牧師として毎日「ヨブ記」について連続講演した。「ヨブの如く、いかなる艱難を受けても雄々しく信仰に立ちたいし、また使命に生きたいという賀川の訴えは、人々の感動を呼んだ。」「関西からきたグループ、そこには震災後賀川と上京して、本所のセツルメント運動において中心的な役割をになった木立義道、今井よね、がいる。また東京において貧困な人たちの援助活動をしている人々、例えば水上生活者の子弟の教育に奉仕している伊藤伝、出獄者保護運動の八幡弥一、根岸有隣團の山口菊太郎、当時スラムといわれていた下谷万年町で伝道していた後藤文蔵、新宿の貧民街で幼稚園を運営していた柳つる」などである²²⁾。このメンバーは関東大震災復興支援において大きな力となった。

阿部志郎は「賀川の災害に対する対応は、実に素早く機敏でした。そして賀川は、適切な対応をし、まだボランティアという言葉のないときに、ボランティア活動を展開し、それを組織化し、各機関をネットワーク化しました。さらに賀川は、東京市社会局、キリスト教連盟と力を合わせて、不良住宅、スラムを調査し、それを社会に報告」したと言う²³⁾。

豊彦は、東京本所で活動を始める際に神戸で培ったセツルメント活動の方法で始めたが、同時に神戸と本所の違いも認識していた。杉浦秀典は「神戸との大きな違いは、本所地域の住民は、中小企業などの産業を担う市民たちであったことである。失業などでなだれ込んできた神戸のスラムとは違い、すでに生業を確保していた住民の復興を助けるのであるから、おのずと事情が異なっていた」と指摘する²⁴⁾。そのため、豊彦は経済的に精神的に本所の人たちが自立できるようになることを目的とし、本所基督教産業青年会を創設した。本所基督教産業青年会は多くの部門をもち、信仰部、福祉部、組合部、法律相談部、個人相談部、職業相談部などを持っていた。その内容は多岐に渡っており、妊婦を保護したり、子どもの健康について相談を受けたり、編み物や縫物の教室を提供したり、子どもの遊ばせ方を教えたり、子どもクラブを運営したり、子どもの本を読んだり、明日の勉強を準備する機会を提供したり、無料の風呂を提供したり、多くのレクリエーションの行事を開催した。

伊丹謙太郎は、神戸と東京での活動の相違点について、①都市構成の違い、②賀川豊彦の社会的地位の変化、③同労者（原文のまま引用）の立場の変化を指摘する。①都市構成の違いとして神戸はスラム街であったが、本所は零細事業者・労働者の町である。②豊彦の社会的地位の変化として、関東大震災が起こった時には、豊彦はオピニオン・リーダー、労働組合運動などの社会運動指導者としての経験をもっていた。③同労者の立場の変化として、賀川の直接的リーダーシップから間接的リーダーシップへ、そして賀川渡米および帰国後の神戸イエス団の活動（同労者の増大）、本所同労者の社会属性（女性・多様性・イエスの友会）を指摘している。²⁵⁾

1923年10月末、豊彦とハルは被災者支援のために神戸から東京へ引っ越した。同時に神戸で一緒に活動していた馬島侘医師と彼の妹も神戸から東京に移り被災者を支援した。

11月1日、一人の大工、田中源太郎が京都から東京の本所にやってくる。彼は大工として復興支援に協力したいと考え、台所や風呂場などを建てた。また、1人の女性、渡辺てるこが1月神戸のスラムを訪れた。彼女もまた本所基督教産業青年会のボランティア希望だった。彼女はカブのに入った美味しい味噌汁を作った。豊彦やボランティアたちは彼女がつくる美味しい朝食を食べ幸せになった。彼女は矯風会の一員だった。

阿部志郎は、豊彦について「賀川はボランタリズムをボランタリー・アクションとして実践しながら、背後にあって支えるキリストの福音を、全世界を舞台に宣べ伝えるのに、思いを尽くし力を尽くしたとも言えることができるかもしれません。一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災で賀川のボランタリー・アクションはダイナミックに発揮されました。（中略）関東大震災でのニーズに対する賀川の感性の豊かさと愛の深さ、迅速にして機敏な行動力、優れた巧みな組織力、ボランティアの動員と調整力にはただただ目を見張るばかりです。ここにはボランタリー・アクションの何であるかが如実に物語られていると言えるでしょう。」という²⁶⁾。

次に豊彦が展開した復興支援活動を事業ごとにみていきたい。

④ 豊彦が展開した復興支援活動

A. 本所基督教産業青年会について

本所基督教産業青年会の事業概況を見ていきたい²⁷⁾。豊彦たちは、10月19日本所松倉町にテントを立ててから2か月半後（1924年1月頃）下記に示すような活動を展開していた。宗教部、教育部、調査部、社会事業部、無料診療所・児童健康相談所、牛乳配給所、児童栄養食給与、体育部、低利事業資金貸金、組合事業部、無料宿泊所、巡回看護婦養成等であり、短期間に驚くべき活動内容である。神戸で共に活動してきた仲間たちが上京し復興支援にあたったこと、イエスの友の会のメンバーが御殿場での夏期祈祷会の学びを実践したこと、全国から復興支援に駆けつけてきたボランティアがいたことなどが大きな要因であるが、何といても豊彦が14年間神戸で実践してきたセツルメント活動が基本になっている。1909年神戸のスラムで活動を始めた時は豊彦はたった一人で始めたが、1923年関東大震災の復興支援の時は、豊彦は『死線を越えて』などのベストセラーにより日本中に知られていたことなどもあり、多くの協力者が得られた。

1. 宗教部（伝道、講義、天幕児童保育）
2. 教育部（編物・裁縫・刺繍講習、英学院、図書室、文化講演）
3. 調査部（人口調査）
4. 社会事業部（職業紹介、無料人事法律相談、バラック経営、救済部一衣類、毛布、布団の提供）
5. 無料診療所・児童健康相談所（診療、巡回看護師）
6. 牛乳配給所（市社会局の委託による牛乳配給事業）
7. 児童栄養食給与（市社会局の委託による栄養食配給）
8. 体育部（児童の遊戯、体操の指導）
9. 低利事業資金貸金（信用組合）

10. 組合事業部（労働、消費）

11. 其他の事業（無料宿泊所、巡回看護婦養成）

これらの活動は事業として独立し、現在まで継続しているものも多い。

B. 中ノ郷質庫信用組合

前に述べた、本所基督教産業青年会事業「9. 低利事業資金貸金」は、無利子無担保で行ったため貸金が回収できず失敗した。その後、クリスチャンで質屋を営んでいた人を中心に進めたことで中ノ郷質庫信用組合が生まれた。

1928年6月14日、中ノ郷質庫信用組合を設立し、被災者に安い利息でお金を貸すことを目的とした。もしお金が決められた日までに返せなくても質草が流れることはなかった。中ノ郷質庫信用組合、江東消費組合、本所基督教産業青年会の建物は並んで建てられた。現在、中ノ郷質庫信用組合は「中ノ郷信用組合」と名称変更して事業を継続し地域に貢献している。バブル経済がはじけた時も、中ノ郷信用組合は地域の人々や商いを支え続けた。現在も、豊彦がモットーとした相互援助や支援のスピリットを持ち続けている。

阿部志郎は中ノ郷質庫信用組合について「困っている人に日銭の貸し付けをしました。質屋です。そして、江東消費組合を組織し、さらに医療購買組合として、これが病院へと育ちます。こうして賀川が始めた事業が今日まで続き、中ノ郷信用組合になり、本所賀川記念館、東駒形教会、そして社会福祉法人の雲柱社が8つの施設をつくり、そこで地域活動をしています。」と語る²⁸⁾。

C. 江東消費組合

豊彦は1927年4月18日江東消費組合を設立した。神戸で賀川と活動していた木立義道が事務全般を引き受けた。その誠実な人柄で、本所基督教産業青年会主事、そして中ノ郷質庫信用組合や江東消費組合の実質的な責任者となる。木立義道は江東消費組合について「組合は創立以来順調な発達を遂げて、四ヶ月毎の決算に已に二回二分五厘宛の購買高配當を致しました。この配當によりて近隣との関係は著しく緊密さを増して来たやうに存ぜられます。現在組合員は二百五十名、月賣上高三千圓です。店舗も今迄のやうなバラックですと品物が損じ尚不整頓になり勝ちですがこの建物が出来れば気持よく仕事が出来ると存じます。建物は間口三間奥行四間の二階建です」と述べている²⁹⁾。この事業は1945年3月まで続く。

D. 光の園保育学校

社会福祉法人雲柱社ホームページには、「1923年関東大震災がおこるや急遽救援にかけつけ、本所（墨田区）にて奉仕活動を行った。ここで始めた託児所が1928年に『光の園保育学校』へ発展、雲柱社の原点となった」と紹介されている³⁰⁾。

雲柱社は、絵を描くことが得意であった豊彦がよく「雲の柱」の絵を描いていたことに関する。砂漠の中をラクダと共に歩く一人の旅人がおり、雲の柱に導かれながら旅をしている絵であ

る。筆者がdocentとして活動していた賀川記念館に豊彦が描いた「雲の柱」の絵が展示されており、この絵を解説すると、来館者がとても興味をもって聴いてくれた。この絵は旧約聖書の出エジプト記12：21-22において、エジプトで奴隷となっていたイスラエル人をエジプトから脱出させる時、神が「昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを照らし、昼も夜も彼らを進み行かせられた」に基づいている。豊彦は、自分自身の人生も、常に神が示す「雲の柱」に導かれ、いろいろな活動に取り組んだと考えられ、雑誌に『雲の柱（1922年から戦争直前まで発行）』と名付けたり、東京の社会福祉法人を「雲柱社」と名付けている。この社会福祉法人の原点となったのが関東大震災後テントで実施した保育活動であり、現在の光の園保育学校はじめ関東一円の児童福祉施設につながっている。

東駒込教会の戒能信生牧師は平成29年9月3日NHKラジオ第二の「宗教の時間」の中で、次のように語っている。「テントを立てて救援本部にしたんですけれども、まず集まってきたのは子ども達だったんですね」「親はいても、子供どころじゃないんです、親は。お金を稼がなくちゃいけないし、仕事はしなくちゃいけない。掘っ建て小屋は建てなくちゃならない。子供はほととかれるわけですね。そういう子供たちがテントに集まってきましてね。百人以上集まってきて、その子供たちを相手に子供かい活動を始めたという記録が残っていました。」「やがて働きに出るお母さんたちから『仕事に行かなくちゃいけないので子供を預かってくれないか』という要望が出ましてね、託児所を開くんです。」³¹⁾

E. その他

本所基督教産業青年会の宗教部は東駒形教会や本所賀川記念館へ引き継がれる。戒能氏は、豊彦の復興支援がキリスト教会に対して社会的関心や社会運動を促したと語る。豊彦はキリスト教会の中で評価が低かった。それは、聖書学者のように神との縦の関係を論じる人が優秀と考えられていたからである。しかし、関東大震災時の豊彦らの活躍によって、キリスト教会も神との横の関係、つまり社会問題へ関心をもつようになったと言う。2015年まで東駒形教会牧師であった戒能信生氏は「キリスト教の戦前の各教派に、つまり教会に社会委員会というのができるのは、関東大震災の直後です。本当に被災者たちの支援活動を通して、そういう活動が教会に必要なもの、教会がしなければならないことだという意識が広がっていった。その先鞭を賀川豊彦はつけた、ということができないんじゃないかと思います」と語っている³²⁾。

2015年、第3回国連防災世界会議が仙台で開催され、仙台枠組みが提唱された。その中で何度も言われたキーワードが「ビルドバックベターBuild Back Better」である。災害が起こる前より住みやすい地域、住みやすい社会を目指そうという意味である。阿部志郎は、豊彦が山本権兵衛総理に請願した、ある事に着目している。それは『復興した東京で公娼を認めるな』というものである。賀川は『復興の精神』という文章で、東京市民に復興には精神的向上を欠かすことができないと主張した。³³⁾救世軍の山室軍平や賀川豊彦は、公娼制度を国家公認の人身売買による奴隷制度ととらえており、復興する新しい東京では公娼制度を認めないように政府に請願した。

豊彦はモラルの向上をも含めた震災復興を目指していた。

1924年4月、豊彦は帝国経済会議のメンバーになり、行政とともに東京の復興に取り組んだ。焼け野原となった東京市は内容のある復興計画を立てたが、政府は復興支援の費用を削ってきた。政府も自治体も復興予算に限りがあった。そのような中、民間活動家である豊彦や仲間たちは本所を中心に様々な活動に取り組み、それらの多くが100年近く継続している。

（５）100年続く賀川豊彦の復興支援

100年近く続いている賀川豊彦関係の施設、本所賀川記念館、光の園保育学校、中ノ郷信用組合は、約38,000名が焼死したと言われている被服廠跡地に近い³⁴。この地域は火災により建物が焼失しバラックが立ち並び、豊彦は神戸の2畳長屋や3畳長屋が立ち並んでいたスラム街のイメージと重なり、この地をセツルメント活動の拠点と決め、その活動が現在まで続いている。

阿部志郎は、「賀川が展開をしたのは、レスキュー、リリーフ、リハビリテーション、そしてリコンストラクションへと結びつけ、発展をさせるということ」であったと指摘する。レスキューとは「倒れている人を、家屋に埋もれている人を救い出す」などの最初の救援、そして、リリーフを「衣食住を確保、ライフラインの確保」とする。阿部は「普通の災害の救援はここで役割が終わる」という。しかし、本当の復興には「リハビリテーション、そしてリコンストラクションという発展がなければ、持続可能な開発、復興ということができないのだと思います。リリーフで終わらずに、それが復興、まちづくりへと結びついてきたところに持続可能な社会がある、そこに新しい希望を持って生み出されるものと思います。」という³⁵。

1995年阪神淡路大震災が起こった時、豊彦の関東大震災支援は多くの人に注目された。豊彦の復興支援から学ぶべきことが多くあったからである。2002年1月16～20日神戸市勤労会館で展示「ボランティアの先駆者；賀川豊彦と関東大震災」が開催された。多くの人が展示に訪れ、当時ボランティアという言葉が根づいていない時代だが、賀川や仲間たちが行ったボランティア活動に改めて注目した。村山盛嗣賀川記念館長（当時）は、「市民サミットin神戸～震災から生まれた学びと出会い～の一般展示に、私たちは、賀川豊彦と関東大震災に学ぶ特別展示の機会が与えられました。ボランティア国際年の第一の目的は、地域や国内、また国際的なボランティア活動が市民社会の重要な一部であることへの認識を高めることです。阪神淡路大震災を体験した私たちは、そこで学んだことを、21世紀へ知的財産として継承する責任があります。」と語っている³⁶。

牧田稔は豊彦の活動について「今日の私たちが注視したい事項として①支援団体や行政との連携・組織化の必要性（今日で言うネットワーク）②社会調査に基づいたパブリックポリシー（政策提言）。例えばバラックのスラム化に憂慮して、住宅の供給・改善策の提言等の必要性③阪神大震災後、心のケアが問題提起されたが、賀川は被災者の精神復興運動が重要だとして、心に希望と活力を与えることの必要を強調」したと言う³⁷。

この特別展の主催団体の一つであるコープこうべは「期間中、賀川の講演を若い頃聞き感銘を受けた方、父母等とゆかりがあり思想的にも影響を受けた方等が来訪され、改めて賀川の思想と

行動の社会的影響力の大きさを確認した。また、『死線を越えて』の映画上映にも予想外の多くの方が来られた。関東大震災の救援活動について書かれた執筆には、阪神・淡路大震災を経たKOBEに生きる教訓も多く、賀川の見識性と洞察力に共感される見学者も多くおられた」と述べている³⁸⁾。

2011年東日本大震災の時にも、人々は豊彦の復興支援を思い出した。とくに、徳島は豊彦の父の出身地であり、豊彦自身幼少期を徳島で過ごしたことから徳島県には鳴門市賀川豊彦記念館がある。東日本大震災の後、政府は南海トラフ地震の被害想定を大きく見直した。徳島県は今後30年間で70～80%の確率で起こるといわれている南海トラフ地震で大きな被害が予測されている。鳴門市賀川豊彦記念館は、関東大震災時の豊彦の復興支援を振り返り、南海トラフ地震に備えようという目的で、2013年9月1～29日特別企画展「賀川豊彦と関東大震災～南海トラフ地震に備えて」を開催した。賀川豊彦記念・鳴門友愛会が「関東大震災が発生して今年90周年になる。東日本大震災の傷跡も癒えない中で、新たに東南海巨大災害の恐怖がささやかれている。来るべき災害に備えて私たちは何をすればよいのであろうか。全力で救援活動に当たった賀川豊彦の奉仕精神と行動力に学びたい」と特別企画展と2つの講演会を企画した³⁹⁾。

竹森幹男は、この特別企画展のサブタイトル「南海トラフ地震に備えて」を担当した。「今後の地震対策を考えると、賀川豊彦を思い、空を見上げながら心に浮かんだことは次の通りであった。『起こってからの取り組み』被害救援はもちろん重要であるが、『起こる前の事前の取り組み』防災がさらに重要であると。」と語る⁴⁰⁾。

豊彦は大正十三年9月号の雑誌『太陽』に次のような文章を書いている。「東京市は被服廠跡に記念會館を造ると云つてゐるが、私はそれよりも必要なのは、災害豫防研究所及び安全博物館を設けて、平時に於ける災害防止と、非常時に於ける災害の豫防に對して完全なる知識を、庶民一般に教育する必要があると思ふ。」⁴¹⁾

前兵庫県知事の貝原俊民は、「阪神・淡路大震災被災地から社会運動について考えるシンポジウム」の基調講演「阪神・淡路大震災と『賀川精神』」において、「県知事時代、人と防災未来センターの設置協力を国などに求める際、『関東大震災のとき、賀川が災害予防研究所及び安全博物館を設ける必要性を訴えていたということを説得材料によく使った』」と語っている⁴²⁾。豊彦は神戸生まれであり、神戸のセツルメント活動は兵庫県と協力して進めていたこともあり、代々の兵庫県知事と豊彦は親しい関係にあったことから貝原前知事も豊彦の活動をよく理解していた。貝原前知事は豊彦の災害予防研究所や安全博物館のことを念頭に、阪神淡路大震災の後、現在、全国から数十万人の来館者が訪れる「人と防災未来センター」の創設に尽力した。

(6) まとめ

賀川豊彦は宣教師で社会改良家である。1923年9月1日関東大震災が起こった時、豊彦はすぐに震災支援に取り組んだ。豊彦の復興支援の特徴は震災から100年近くたつ今日でもその事業や活動が継続している。

1909年12月24日、21歳の賀川豊彦は神戸のスラムに住みこみ、貧しい人たちを支援するセツルメント活動を始めた。1923年9月1日関東で起こったマグニチュード7.9の大地震を、当時神戸で活動していた賀川豊彦が知ったのは翌日9月2日の新聞であった。この大地震で、横浜では多くの建物が倒壊し下敷きとなった人たちが亡くなり、東京では地震の後起こった大火災により多くの焼死者がでて、合わせて10万人以上の人々が犠牲となった。豊彦は9月2日朝刊を読んだ後、すぐに行動を起こした。神戸YMCAや教会のメンバーと話し合い、同日の夕方には山城丸に乗り、神戸から横浜へ向かった。そして横浜や東京のすさまじい被害を目にすることになる。被害状況を把握し、何が必要か調査した豊彦はすぐに神戸へもどり、街頭募金や講演会などで資金を集め、物資を調達し、再び東京に向かう。

豊彦は焼け野原となった東京の本所で復興支援を開始する。神戸で共に活動してきた仲間たちも東京へ行き、当時ボランティアという言葉がなかった時代だが、全国から東京の復興を手伝いたいという人たちと現在でいうところのボランティア活動に取り組む。

彼らは様々な活動に取り組んだ。保育施設や学校が倒壊・焼失しており、また親たちは震災の片づけや今後の生活などのために子どもの世話まで手が回らなくなっていたので、テントで保育活動を始める。また児童クラブ、診療所、健康や法律や生活の相談なども始める。これらは、のちに本所基督教産業青年会の活動につながる。また、震災により家や仕事を失った人たちは日々のお金に困っていた。豊彦は中ノ郷質屋信用組合をつくり、質屋で日銭の貸し付けをした。この質屋の特徴は通常の質屋より低利でお金を貸すこと、また、もし期限までにお金を払えない場合も質草が流れないという点にあった。また、江東消費組合を組織したり、医療購買組合をつくる。これがのちの中野総合病院につながる。

賀川豊彦の復興支援は、1923年関東大震災から95年以上経た今日まで継続している点に特徴がある。先に述べた保育活動は光の園保育学校として、病院は中野総合病院として、そして中ノ郷質屋信用組合は現在の中ノ郷信用組合につながり、本所基督教産業青年会は本所賀川記念館や東駒形教会へ発展し、そして賀川が関東に設立した社会福祉法人「雲柱社」は86か所の福祉施設で現在も活動している。

賀川豊彦の活動の原点は、1909年21歳の時に始めた、神戸の貧しい地域に住み込み生活困窮する人たちを支援するセツルメント活動である。彼はその活動の中で「救貧」活動では本質的な問題解決ならず、「防貧」活動こそが重要であることに気づく。そして、それは貧困にとどまらず、病気や失業や戦争などに備えることも重要であると考え、国民健康保険や現在のハローワーク、そして平和運動につながる多岐にわたる活動を行う。また、賀川は災害に備えることも重要であるとして災害予防研究所や安全博物館の創設を提案している。賀川の構想を知り、それを実現したのが阪神淡路大震災の時に兵庫県知事であった貝原俊民氏である。貝原前知事は、神戸の「人と防災未来センター」創設を提案し、その実現に尽力した。

人々は、阪神淡路大震災の時に、そして東日本大震災の時に、豊彦の復興支援を思い出した。本稿では賀川豊彦の100年近く続いている復興支援が災害記憶の風化を防止することができるの

ではないかという仮説を立てていた。現在「東北において災害記憶の風化が始まっている」といわれるが、日本各地で起こっている災害の記憶を風化させないことは次に起こる災害の備えとして重要となっている。各地で災害記憶を風化させない方法を模索しており、目に見える形として石碑などに震災や被害のことを刻む、被災した建物や構造物を保存する、写真や映像やインタビュー記事等を残すなどの方法がある。本稿では、震災記憶を風化させない方法として、100年近く続く豊彦の関東大震災支援を分析してきた。石碑のように見える形ではないが、事業や施設の沿革や歴史を振り返ると必ず災害を思い出すようになっており、豊彦の100年続く復興支援が災害記憶を風化させない方法の一つとして有効であることが明らかとなった。

今後はさらに詳しく賀川豊彦の復興支援について見ていきたい。

引用文献

- 1) 賀川豊彦『死線を越えて』上巻・下巻、改造社、1927。
- 2) 浜田直也「解説―『賀川豊彦とボランティア』」村山盛嗣編『賀川豊彦とボランティア』神戸新聞総合出版センター、2009、324頁。
- 3) 杉山健一郎「三陸罹災地慰問記～三月三日午前二時三十二分～」『火の柱』第61号1933年4月10日、448頁。
- 4) 追悼録編集委員会編『み翼の影に～賀川豊彦追悼式記念～』賀川記念事業委員会、1960年、9頁。
- 5) 加藤雍太郎、中島宏、小暮亘男『横綱町公園～東京都慰霊堂・復興記念館』東京都公園協会、2009、57頁。
- 6) 諸井孝文・武村雅之「第1章第1節地震の発生と被害規模」中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1923関東地震報告書 第1編』中央防災会議、2006年、1頁。
- 7) 諸井孝文・武村雅之、前掲書、2頁。
- 8) 賀川豊彦「震災救護運動を顧みて」『太陽』大正13年9月号、215頁。
- 9) 武藤富男『評伝賀川豊彦』キリスト新聞社、1981、342頁。
- 10) 黒田四郎『私の賀川豊彦研究』キリスト新聞社、1983、152頁。
- 11) 横山春一『賀川豊彦伝』警醒社、1959年、199頁。
- 12) 「春子夫人の災害地への慰問」三原容子編『賀川ハル史料集第2巻』緑陰書房、2009、60頁。
- 13) 横山春一、前掲書、200頁。
- 14) 奈良常五郎『日本YMCA史』日本YMCA同盟、1959、237頁。
- 15) 賀川豊彦『地球を墳墓として』アテネ書院、大正13年、92頁。
- 16) 賀川豊彦『地球を墳墓として』アテネ書院、大正13年、89-90頁。
- 17) 賀川ハル「1928年日記」三原容子編『賀川ハル史料集第2巻』89頁。
- 18) 田辺健二「賀川豊彦と関東大震災」“Think Kagawa”
<http://d.hatena.ne.jp/kagawa100/20110414/1302768681> 2018年5月8日検索。
- 19) 田辺健二、前掲論文。
- 20) 賀川豊彦「震災救護運動を顧みて」『太陽』大正13年9月号、217頁。
- 21) トヨヒコ「松倉町のバラックより」『雲の柱』第3巻第6号、大正13年、849頁。
- 22) 雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』新教出版社、2005、259頁。
- 23) 阿部志郎「震災とコミュニティー」賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編『Think Kagawa ともに生きる』賀川豊彦記念・松沢資料館、2010年、13頁。
- 24) 杉浦秀典「日本における戦前・戦後の社会事業～賀川豊彦を中心として～」『都市問題』第100巻第7号、2009年、91頁。
- 25) 伊丹謙太郎『関東大震災復興における賀川豊彦とその同労者の取り組みに見る地域形成の視座の検討』全労済協会2016、15頁。

- 26) 阿部志郎ほか『賀川豊彦を知っていますか～人と信仰と思想～』教文館、2009年、41～42頁。
- 27) 杉浦秀典「日本における戦前・戦後の社会事業～賀川豊彦を中心として」『都市問題』第100巻第7号、2009年7月号、91頁。
『雲の柱(復刻版)』第3巻、1990年、緑蔭書房の中の『雲の柱』1月号(大正13年1月1日発行)190頁。
- 28) 阿部志郎、前掲論文、2010年、13頁。
- 29) 『火の柱』第19号、昭和3年6月1日、6頁。
- 30) 社会福祉法人雲柱社ホームページ (http://fukushi.unchusha.com/unchusha_history.html) 2018年5月18日検索。
- 31) 平成29年9月3日NHKラジオ第二の「宗教の時間」<http://h-kishi.sakura.ne.jp/s-188.htm> 2018年5月8日検索。
- 32) 平成29年9月3日NHKラジオ第二の「宗教の時間」、前掲ホームページ。
- 33) 阿部志郎、前掲論文、2010年、13頁。
- 34) 東京都慰霊協会「東京都横網町公園」東京都慰霊協会、2017年1月、頁なし。
- 35) 阿部志郎、前掲論文、2010年、14頁。
- 36) 賀川豊彦特別展実行委員会編『ボランティアの先駆者賀川豊彦と関東大震災～災害ボランティアの源流を探る～』賀川豊彦特別展実行委員会、2002年、頁なし。
- 37) 牧田稔「賀川豊彦と関東大震災特別展開かれる～災害ボランティアの源流を探る～」『ボランティア：記念館だより』第75号、賀川記念館、2001年、10頁。
- 38) コープこうべ生活文化・福祉部 福祉・ボランティア活動『復旧・復興・飛翔 1.17 阪神・淡路大震災7周年記念事業』(財) 阪神・淡路大震災記念協会、2002、39頁。
- 39) 賀川豊彦記念・鳴門友愛会『友愛』第21号、2014年1月15日。
- 40) 竹森幹男『『関東大震災と賀川豊彦展示会』を終えて～南海トラフ地震 県内の大地震の痕跡を訪ねて』NPO法人賀川豊彦記念・鳴門友愛会研究部編「賀川豊彦と関東大震災」特集号『阿波牧舎』vol.11、2014年、43頁。
- 41) 賀川豊彦「震災救護運動を顧みて」『太陽』大正13年9月号、219頁。
- 42) 「賀川豊彦の活動に学ぶ」『神戸新聞』2009年7月14日。

受理日 平成30年9月27日